

中学校 教育相談

中学校における不登校予防の取組に関する研究
—スクールカウンセラーとの協働的取組を通して—

教育相談課 研究員 石塚 香織

要 旨

中学校においてＳＣと協働で不登校を予防する取組体制を構築し、こころの健康促進プログラムを実施した。その結果、学校環境適応感尺度では向社会的スキル得点に差があった。さらに学級風土の生徒間の親しさを高める要因になることが認められた。また、ＳＣと連携することは生徒を多角的な視点から見立てることに繋がり、適切な支援を可能とする。これらの結果から、ＳＣとの協働的取組は不登校予防の一つの手段として有効であることが示唆された。

キーワード：不登校予防 こころの健康促進プログラム ＳＣとの協働的取組 教育相談

I 主題設定の理由

近年、少子化や核家族化、情報化や国際化等、子供を取り巻く社会環境や生活環境の急激な変化により生活習慣の乱れ、いじめ、不登校、児童虐待等、こころの健康問題が顕在化している。

特に、不登校は、「令和元年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」（文部科学省、2020）によると、不登校生徒を年度間に連続又は断続して30日以上欠席した児童生徒で、何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくてもできない状況にある者（ただし、「病気」や「経済的な理由」による者を除く）と定義し、令和元年度の不登校児童生徒数が18万人を超える過去最高の数値を示した。特に、中学校では127,922人と25人に1人の割合で不登校生徒が出現するという過去最高の割合が示された。本県においても、令和元年度の不登校生徒数は998人で、その割合は3.21%と全国と同様に増加しており、危惧される状況である。

不登校の予防について、「生徒指導リーフ『不登校の予防』」（文部科学省、2014）では、学校を休みたいと思わせない魅力的な学校づくりを進める未然防止と、学校を休みそうな生徒や休み始めた生徒に個別対応をする初期対応の両方の必要性が示されている。現在、各学校では、これに基づいて創意工夫した魅力ある学校づくりに取り組んでいるが、依然として不登校生徒数が増加傾向である。

本間ら（1999）は「欠席願望を抑制する要因として、登校理由の中の『学校魅力』が大きな影響を与えていた」ことを示し、小林（2002）は「『学校魅力』は、学校には友人もいて、楽しいことがある」ことだと述べている。さらに、吉井（2016）は「こころにも何かの栄養が必要であり、栄養を吸収しないと、こころを維持できなくなってしまう」とし、「人間のこころの栄養素として、〈自信〉、〈希望〉、〈仲間〉が重要である」と述べ、特に「不登校の予防においては孤独感を癒やしてくれる〈仲間〉が最も重要である」とした。

中学生においては、不登校に大きな影響を与える原因の一つが対人関係だと考えられる。特に仲の良い友人の存在は学校魅力に大きな影響を与える。しかし、一方で仲が良いからこそストレスを感じる関係性に転じることもあり、それが不登校に結び付いてしまうことがある。その他、同級生との関係も重要である。なぜなら、周囲と良好な関係が築けないことから生じる漠然とした不安が不登校につながると考えられるからである。日本の子供の現状として、社会性や対人関係能力の低下と感情に問題を抱える子供の増加が挙げられており、魅力的な学校づくりと並行して、生徒のこころの健康の促進を図る必要性があるのではないかと考えた。

筆者のこれまでの教職経験を振り返ってみても、絆づくりや居場所づくりを意識した取組を実施することは多かったが、生徒の心理面へのアプローチを意識した取組は少なかった。さらに、生徒個人に対して適切な支援ができていたとは言い難い。教科担任など複数の教員間と連携を図りつつも、もっと他の支援方法があったのではないかと振り返ることもあり、教員と異なる視点をもつスクールカウンセラー（以下、ＳＣと

する)と協働で不登校予防を目指す取組を研究したいと考えた。吉井(2016)は、「予防においては子どもの『分かってもらえなかった』というズレに対して、支援者がどのように気付き対応するのが重要である」と述べている。特に、SCとは問題が表面化してから連携をすることが多い。そこで、未然防止の段階から協働することが多角的な視点からの生徒理解につながり、個別支援の効果が高まると考えた。

このことから、本研究では、SCと協働して実施するところの健康促進プログラムと連携体制が不登校予防に有効であるか、生徒と教員の両側面から検証したいと考え、本研究主題を設定した。

II 研究目的

中学校において、不登校を予防するために、教員とSCが協働して、こころの健康促進のためのプログラムを作成及び実施し、連携を強化する体制を構築することの有効性を明らかにする。

III 研究の実際とその考察

1 不登校を予防するための取組について

(1) こころの健康について

厚生労働省は「21世紀における国民健康づくり運動《健康日本21》」において、「こころの健康とは、いきいきと自分らしく生きるための重要な条件」とし、具体的には、「自分の感情に気づいて表現できること(情緒的健康)、状況に応じて適切に考え、現実的な問題解決ができること(知的健康)、他人や社会と建設的でよい関係を築けること(社会的健康)を意味している」とした。さらに、「人生の目的や意義を見出し、主体的に人生を選択すること(人間的健康)も大切な要素」と示している。現在の日本の子供たちが抱えている問題は、こころの健康状態の低下だと考えられる。そこで、こころの健康を促進することが学校生活を生き生きと過ごすために必要だと考えた。

(2) 本研究における不登校予防

本研究では、鈴木ら(2005)が示した具体的な流れを教員主導に改めた(図1)。全ての生徒を対象としたこころの健康を促進するプログラムを作成・実施する。これにより自己理解と他者理解が深まり、自分自身で課題を解決しようとする人間的成長を目指した。その結果、仲の良い特定の友人だけでなく、その他周囲の人との関係性の向上につながると考えた。しかし、不登校予防には、全ての生徒を対象としたプログラムだけでなく、個別支援も欠かせないと考えられる。そこで、各プログラム終了後に、教員とSCが注目した生徒の様子について簡単なコンサルテーションを実施した。この取組が初期対応に当たり、生徒の様子に応じて必要と思われる支援方法を多角的な視点から提供できると考えた。つまり、本研究では、こころの健康を促進するプログラムを実施することを未然防止の取組とし、教員がSCとのコンサルテーションを通して、支援内容を確認し実施することを初期対応の取組とし、これらをまとめて不登校予防の取組とした。

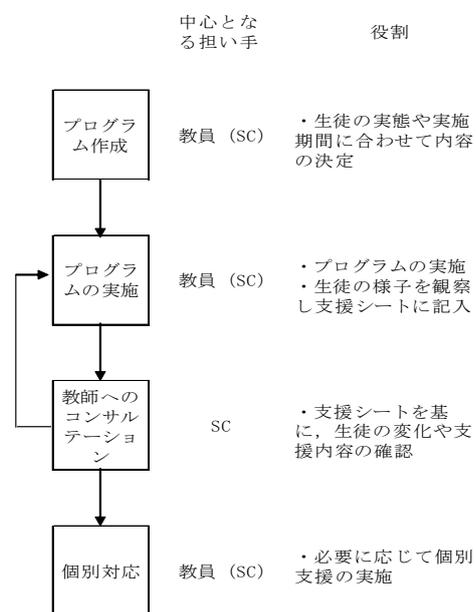


図1 SCとの連携体制

2 プログラムの概要と特徴

本研究で、こころの健康促進プログラム(以下、プログラムとする)(表1)を作成する際に工夫した点は以下の3点である。

(1) 吉井(2016)が述べている人間のこころの三つの栄養素を獲得することを目指し、厚生労働省が示したこころの健康促進を図る内容とした。

ア 情緒的健康の促進を図るために、自分の長所を理解し、自信をもつことや他者から見た自分を知り、自己理解を深める活動を行った。

イ 知的健康の促進を図るために、問題を冷静に把握し、状況に応じて課題を解決する方法を考える活動を行った。

ウ 社会的健康の促進を図るために、他者の考えを受け入れ、理解する活動や折り合いをつけて協力する活動を行った。

エ 人間的健康の促進を図るために、自分が興味があることや、やりたいことは何かなど自分の将来について考えを巡らせ、希望を持つ活動を行った。

(2) 生徒の実態や実施時期を考慮したプログラム内容とした。

(3) SCが実施した内容と次時の教員が実施する内容は関連がある内容とした。

表1 こころの健康促進プログラム

時	主な活動	活動のねらい	こころの健康
1	・ガイダンス ・ラッキーセブン ・ZOOMとRE-ZOOM	・プログラム内容の理解を深める。 ・相手と気持ちが通じ合う喜びに気付く。 ・学級の全員と協力する楽しさに気付く。	・情緒的健康 ・知的健康 ・社会的健康
2	・職業探索	・職業に対する自己理解を深め、将来への希望をもつ。	・人間的健康
3	・聖徳太子ゲーム ・「聞く」と「聴く」	・グループと協力する大切さと楽しさに気付く。 ・「聞く」と「聴く」の違いを理解する。 ・相手の感情を理解する。	・情緒的健康 ・社会的健康
4	・短所を乗り越える	・自分の長所や短所に気付き、周りから認められていることや短所の克服方法について知る。	・情緒的健康 ・社会的健康
5	・ごちゃまぜビンゴ ・ジョハリの窓	・他者への肯定的で積極的な関わりと気持ちを育む。 ・自己を様々な視点から理解する。	・情緒的健康 ・社会的健康
6	・ハッキリンで気持ちを伝えよう	・自分と他者の両方の気持ちを大切にすることのコミュニケーション方法について理解する。	・情緒的健康 ・社会的健康
7	・ストロータワー ・砂漠からの脱出ゲーム	・他者と協力することやコミュニケーションの必要性を理解する。 ・意見をまとめるために折り合いをつけることの必要性を学ぶ。	・知的健康 ・社会的健康
8	・ストレスマネジメント	・ストレスとその対処方法について理解を深める。	・情緒的健康 ・社会的健康
9	・いまどんな気持ち？ ・課題を解決する	・同じ場面でも抱く感情は人それぞれ異なることを理解する。 ・課題解決のための具体的な考え方を理解する。	・情緒的健康 ・知的健康

3 検証方法について

(1) 学校環境適応感尺度（アセス）

学校環境適応感尺度ASSESS（以下、アセスとする）は、栗原ら（2010）が作成した「生活満足感」「教師サポート」「友人サポート」「非侵害的關係」「向社会的スキル」「学習適応感」の6因子34項目の5件法からなる、児童生徒の学校適応感を図るための尺度であり、この6因子には相関がある（図2）。そのうち、プログラムの効果を検証するため、学校生活のみに関わる「友人サポート」「非侵害的關係」「向社会的スキル」の3因子について検証した。た

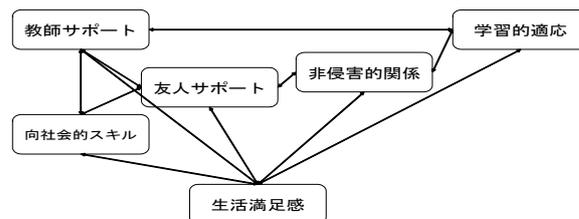


図2 「アセスの各因子間の相関図」栗原ら（2010）

だし、SCと教員が抽出した生徒については「生活満足感」を検証した。

(2) 新版中学生用学級風土尺度 (CCI)

新版中学生用学級風土尺度 (以下、CCIとする) は、伊藤ら (2017) が作成した尺度で、「学級活動への関与」「生徒間の親しさ」「学級内の不和」「学級への満足感」「自然な自己開示」「学習への志向性」「規律正しさ」「リーダー」の8因子51項目の5件法からなる、生徒たちの視点から学級風土を直接的かつ多面的に捉えることを意図している尺度である。学級が楽しい、学級の雰囲気が良いと生徒が直接捉えることは不登校を予防する要因になると考えた。本研究では、生徒が捉えたクラスの変容を検証する目的で使用する。そこで、プログラムが関与すると考えた「生徒間の親しさ」「学級への満足感」「自然な自己開示」の3因子とそれぞれの項目の変化を検証した。

4 研究の実際

(1) 調査対象

研究協力校教員及び生徒

教員8名

生徒100名 (男子50名, 女子50名)

(2) 調査期間

1年目…2019年12月18日～2020年2月27日

2年目…2020年5月25日～2020年9月24日

月に1回程度、プログラムを実施した。

(3) 検証授業の実際

プログラムの主な活動と生徒の感想 (原文のまま) を以下に記載する。

ア 1時間目「ガイダンス」, 「ラッキーセブン」, 「ZOOMとRE-ZOOM」

ガイダンスを実施し、学校生活を楽しく過ごすために、自己理解と他者理解を深め、周囲の人と良好な関係を築くことを目的としたプログラムを行うことを説明した。「ラッキーセブン」では、グループ全員が出した指の本数が合計で7になるように一斉に指を出す活動を行った。「ZOOMとRE-ZOOM」では、絵本の「ZOOM」または「RE-ZOOM」の絵柄を1人に1枚ランダムに渡し、学級全員で協力して絵の内容がつながるように並べ替える活動を行った。授業後の生徒の感想には、「僕はあまり団体行動は苦手で、少し避けては来たけど、人の気持ちを読むのはまあまあできました。みんなとやるのも悪くないなと思いました。少しはみんなと協力してやっていきたいなと思いました。」があった。

イ 2時間目「職業探索」

SCが授業を実施した。職業一覧表から自分の関心のある職業を抽出し、キャリアツリーを作る活動である。授業後の生徒の感想には、「自分が将来、やりたいことがこんなにあるんだと自身で驚いた。進路を決めるのはまだまだだけど、今回の授業で自分の将来や今後の人生がとても楽しみになった。」があった。

ウ 3時間目「聖徳太子ゲーム」, 「『聞く』と『聴く』」

「聖徳太子ゲーム」は班でお題の言葉を一人1音担当して一斉に発し、聞いていた他のグループは話し合いながら、それを当てるゲームである。このゲームは「聞く」と「聴く」の違いを理解させるための導入活動として行った。「『聞く』と『聴く』」では、教師とSCが始めに良い聞き方と悪い聞き方の例を生徒に示した。その後、生徒はペアを組んで、最近の楽しい出来事をテーマに設定し、良い聞き方のロールプレイを行った。続いて、「聴く」は言葉に含まれている感情も読み取ることであり、それを読み取るためのヒントを示した。その後、班ごとに気持ち読み取りゲームに取り組みせ、相手の気持ちを読み取る活動を行った。授業後の感想には「今までの自分は目を見て話を聞いたり、言ったりできなかったけど、今日やってみたら自分も良い気持ちになったし、相手も良い気持ちになったと思うので、嬉しかったです。」があった。

エ 4時間目「短所を乗り越える」

エゴグラム診断を参考にし、自分の長所や短所を考えさせた。次に班員の長所を考え、順に発表させた。続いて、自分の短所 (発表してもいいものを選ぶ) を発表し、他の班員は短所を克服するためのアドバイスを話し合う活動を行った。この時は相手を非難するものではなく、相手のためになるように配慮することを伝えた。授業後の生徒の感想には、「自分は長所があまりないと思っていたけど、友達から聞くと、もっと長所があることが分かりました。」があった。

オ 5時間目「ごちゃまぜビンゴ」, 「ジョハリの窓」

「ごちゃまぜビンゴ」はビンゴ用紙の、縦、横、斜めのいずれかを揃えれば完成のゲームである。ビンゴ用紙のマス目には、例えば「給食はパンよりご飯が好き」などが書かれてあり、それに当てはまると思う人を探す活動を行った。「ジョハリの窓」は、始めにジョハリの窓の見方について説明した。次に「open the window」トークを行い、自己理解や他者理解を深める活動を行った。授業後の生徒の感想には、「班の皆が自分のことをどう思っているの分かりました。あと、皆のこともすごく分かったので、そういうのをきっかけにして皆と仲を深めていきたいです。」があった。

カ 6時間目「ハッキリンで気持ちを伝えよう」

SCが授業を実施した。他者と自分と両方の気持ちを大切にコミュニケーションをとるための方法としてアサーティブな表現方法があることを伝えた。最後に代表者がロールプレイを行い、具体的な場面での伝え方についてモデルを示した。授業後の生徒感想からは、「自分は時々、相手の言葉を受け入れないで、自分のことばかり言うときがあるので、今後は意識して話したりしていきたいです。」があった。

キ 7時間目「ストロータワー」, 「砂漠からの脱出ゲーム」

「ストロータワー」はコミュニケーションの大切さに気付かせる目的として行った。班員と協力し、はさみとセロハンテープのみを用いて、できるだけ高いストロータワーを作ることを目標とした。「砂漠脱出ゲーム」は、コンセンサスゲームの1つである。砂漠から脱出するために、道具の重要性を班で話し合い、1つの意見にまとめた。授業内では前時に学習した自分も相手も大切にするように話し合いを進めるように伝えるなど、前時とつながるように工夫した。授業後の生徒感想には「自分の班では、話し合いが上手くまとまって、積極的に意見を出すこともできていて、とても良いなと思いました。ストロータワーは話し合うことの大切さが分かりました。」があった。

ク 8時間目「ストレスマネジメント」

SCが授業を実施した。現在のストレス具合を測り、ストレスを抱えている場合は独りで抱え込まず、身近な人やSCに相談するなど周りに助けを求めることも大切だと伝えた。そして、特に人間関係構築のスキルに着目し、モデルケースを提示しながら、ストレス場面の捉え方や対処方法を教えた。授業後の生徒の感想には、「僕はこの授業を開いてくれてとても役に立ちました。自分もストレスを抱える事がよくあるのでストレス発散で使っていきたいです。」などがあった。

ケ 9時間目「いま、どんな気持ち?」, 「課題を解決する」

「いま、どんな気持ち?」は、自他の感情の違いを理解させることを目的に行った。学校生活の出来事に対する自分の感情を「表情シート」から探して一斉に指差しをし、なぜ選んだのか自分の気持ちや考えを伝え合う活動を行った。「課題を解決する」では「これまで仲の良かったAさんが急によそしくなり、一緒に帰ってくれなくなった」場面を設定した。課題解決のステップを提示し、班員と意見交換しながら、自分なりの解決方法を見だし、具体的な計画を立てる活動を行った。感情に任せた行動をとらず、気持ちを落ち着かせる方法を確認するなど前時のストレスマネジメントを取り入れる工夫をした。授業後の生徒の感想には「今まで自分がどうしてきたか。どうしたいかを改めて見つめ直すことができた。今、友達関係で複雑なところもあるので、もし大きな事につながってしまったら今回のことを冷静に行えるようにしたい。」があった。

(4) コンサルテーションの実践

プログラムを実施後に、学級担任とSCによるコンサルテーションを実施した。場合によって学年主任も参加し、10分程度の短時間で学級担任とSCの見立てを共有した。対象生徒は事前のアセスの結果からSCが抽出した生徒と教員とのコンサルテーションで話題に上がった生徒とした。具体的内容は、SCがプログラム実施中に座席表支援シートへ対象生徒の学習活動の様子や対人関係の様子、心理面の様子を記録した。これを学級担任に伝え、普段の様子や友人関係、家庭での様子について情報交換を行い、支援内容や方法について確認をした。なお、座席表支援シートは岩手県立総合教育センター「中学校1年生の早期対応のために」(2007)を基に作成した。

5 結果

(1) アセスの変化

プログラム実施前後における対象生徒全員の3因子の下位尺度得点を比較した。事前調査は2019年12月に実施し、「友人サポート」63.02, 「向社会的スキル」58.08, 「非侵害的關係」62.42(逆転項目

として処理)であった。全体的に平均得点が高い水準であったが、「向社会的スキル」が他の因子と比べて低い数値であった。事後調査は2020年9月に実施し、「友人サポート」61.23、「向社会的スキル」60.17、「非侵害的關係」60.66であった。この前後差を統計学的に検討するため、ノンパラメトリック検定(ウィルコクソンの符号付順位検定)を行ったところ、「向社会的スキル」が5%水準で有意な上昇が認められた(表2)。そこで、有意差があった「向社会的スキル」の質問項目について前後差を調べたところ、有意差は認められなかったが、「相手の気持ちになって考えたり行動する」の質問では、平均値が事前調査の4.01から事後調査の4.13に上昇した。

次に、栗原は「適応感が低いことは、本人がSOSを発信していること」と述べていることから、適応感の低い生徒への効果も検証した。この3因子の下位尺度得点値の50点を基準とし、50点未満の生徒をSOSを発している群(以下、下位群とする)として、その変容を検証した。3因子ごとの下位群のプログラム実施前後における下位尺度得点を比較したところ、「友人サポート」因子の下位群の事前調査は44.53で、事後調査では44.33であった。「向社会的スキル」因子の下位群の事前調査は46.43で、事後調査は50.06であった。「非侵害的關係」因子の下位群の事前調査は45.56で、事後調査は50.52であった。それぞ

れの前後差を統計学的に比較するため、ノンパラメトリック検定(ウィルコクソンの符号付順位検定)を行ったところ、「非侵害的關係」の得点上昇は有意な傾向がみられた(表3)。

そこで、有意傾向のあった「非侵害的關係」の質問項目における平均値の前後差をノンパラメトリック検定(ウィルコクソン符号付順位検定)を行って比較した。その結果は、「問8 仲間に入れてもらえないことがある」が事前調査の2.60から事後調査の2.21に5%水準で推移し、「問13 陰口を言われているような気がする」が事前調査の3.04から事後調査の2.17に、そして、「問23 友達から無視されるようなことがある」が事前調査の3.47から事後調査の2.78と、ともに1%水準で推移した。また、「問19 友達にからかわれたり、バカにされることがある」も事前調査の3.52から事後調査の3.00に推移し、有意な傾向がみられ(表4)、拒否的・否定的な友達関係があると感じている程度が減少した。

(2) 新版中学生用学級風土尺度(CCI)の変化

プログラム実施前後における対象生徒全員の3因子の得点を比較した。進級する際のクラス替えを考慮し、事前調査は2020年5月に実施し、「生徒間の親しさ」は37.17、「学級への満足感」は25.07、「自然な自己開示」は15.29であった。事後調査は2020年9月に実施し、「生徒間の親しさ」は37.1、「学級への満足感」は25.63、「自然な自己開示」は15.21であった。この前後差を統計学的に検討するため、ノンパラメトリック検定(ウィルコクソンの符号付順位検定)を行ったところ、いずれも有意差は認められなかった。

次に各下位尺度の質問項目の平均値の前後差も統計学的に検討するため、ノンパラメトリック検定(ウィルコクソン符号付順位検定)を行ったところ、「生徒間の親しさ」では、「問15 男子と女子は仲が良い」が事前調査の3.87から事後調査では4.08に5%水準で有意に上昇し、「問18 友達同士助け合う」も事前調査の4.58から事後調査では4.71に5%水準で有意に上昇した。また、「学級への満足感」では、「問33 この学級が気に入っている」が事前調査の4.20から事後調査では4.37に上昇し、有意な傾向がみられた(表5)。

表2 アセスのウィルコクソンの符号付順位検定

下位尺度	N	事前平均値 (SD)	事後平均値 (SD)	z値
友人サポート	100	63.02(14.47)	61.23(14.10)	.945
向社会的スキル	100	58.08 (8.6)	60.17(11.75)	2.092*
非侵害的關係	100	62.42(15.12)	60.66(15.13)	1.197

* $p < .05$

表3 アセスの下位群のウィルコクソンの符号付順位検定

下位尺度	N	事前平均値 (SD)	事後平均値 (SD)	z値
友人サポート	15	44.53(5.16)	44.33(9.92)	.057
向社会的スキル	16	46.43(2.96)	50.06(10.8)	1.372
非侵害的關係	23	45.56(3.66)	50.52(11.47)	1.950†

† $p = .051$

表4 下位群の「非侵害的關係」質問項目ごとのウィルコクソン符号付順位検定

下位尺度	質問項目	N	事前平均 (SD)	事後平均 (SD)	z値
非侵害的關係	問8 仲間に入れてもらえないことがある	23	2.60(1.19)	2.21(1.20)	1.244*
	問13 陰口を言われているような気がする	23	3.04(1.14)	2.17(1.26)	2.645**
	問19 友達にからかわれたり、バカにされることがある	23	3.52(1.08)	3.00(1.41)	1.778†
	問23 友達から無視されるようなことがある	23	3.47(0.84)	2.78(1.53)	2.296**

** $p < .01$ † $p < .05$ † $p = .052$

(3) 生徒事後アンケート

振り返りシートにプログラムごとの感想を自由記述で回答してもらった。全プログラム終了後の主な感想（原文のまま）は以下のとおりである。

- ・あまり話したことがないような人とも明るく楽しく話せることができたので嬉しかったです。意外と人と楽しく話せることが分かりました。
- ・自分はいつも人と協力することが苦手で、考え方も周りとは違うことも多かったけど、自分と同じ人も見つけられたし、他の人がどう思っているかなど分かったの、とても良い経験になって良かったと思いました。
- ・授業を重ねていくごとに考え方や友達関係などが深まったなと思いました。
- ・今まで分からなかった性格、友達とのトラブルへの向き方、相手の話の聞き方など様々な事を考えられました。
- ・今までは、周りの人に興味がなかったけど、人の事を考えたり自分をコントロールできるようになった。
- ・人それぞれの感性があることが分かった。一人一人考え方も違うので、一人一人の考えを受け入れて行動できるように努力したい。
- ・友達とのほどよい関わり方が分かったの、前よりも友達といる時間が楽しくなりました。普段話さない人とも話せて楽しかったです。

(4) SCと教員が抽出した生徒の変容について

SCが目じた生徒は12名であった。この12名のプログラム実施前後のアセスの「生活満足感」の得点を比較したところ、7名が上昇し、2名が変化なし、3名が下降という結果であった。プログラムで実施した支援シートを活用し、SCが見立てた生徒の主な変容は以下のとおりであった。

- ・級友とのトラブルの話は出なくなったが、現在も見守り中である。プログラム最終授業では、過度の積極性は見られなかった。
- ・観察当初から級友との関わりの場面で明るく、積極性を発揮できている。
- ・自信なきげな様子は変わらないが、担任の配慮で友人の関わりから学級に居場所をもてている。
- ・自己主張の強い生徒の前では押し黙る傾向で、コミュニケーションが苦手と話題に上がったが、積極的な発言こそ見られないものの、友人の話をしっかり聞き、グループに関わろうとする姿勢が見られる。

(5) 教員事後アンケート

プログラム実施後、アンケートを自由記述で実施した。主な感想（原文のまま）は以下のとおりである

- ア SCの授業に対する感想
- ・SCがゲストティーチャーとして授業をすることは、子供とのしなやかさがなく新鮮で、素直に子供の心に話す内容が届いていた。
 - ・専門知識をお持ちなので、ハッとさせる教えもあり、その後の生徒とのやりとりの場面で使わせて頂くこともあった。
 - ・生徒とSCの距離が縮まり、相談しやすい環境づくりにつながると思う。
 - ・SCの言葉の選び方、顔の表情、雰囲気良かった。
 - ・生徒が落ち着いて穏やかに授業に臨むことができた。
 - ・自分の内面や他の人との関わりについて学ぶことができ、とてもためになったと思う。
- イ SCと連携することによって教師自身にプラスになったこと
- ・学級担任が気にしていなかった生徒の様子に気づき、教えてもらったことは、その後の対応の参考になった。
 - ・学校中心の考えから、多角的に考えることができた。
 - ・自分が気付けないことに気付いてくれたりして、生徒理解が深まった。

表5 CCIの質問項目のウィルコクソン符号付順位検定

下位尺度	質問項目	N	事前平均 (SD)	事後平均 (SD)	z値
生徒間の親しさ	問12 このクラスはみんな仲が良い	100	4.36(1.91)	4.22(1.95)	1.723
	問13 学校に限らず個人的にも仲が良い	100	4.41(1.76)	4.31(1.95)	1.106
	問14 お互いのことをよく知っている	100	3.89(1.89)	3.86(1.94)	0.66
	問15 男子と女子は仲が良い	100	3.87(1.86)	4.08(1.87)	2.3170*
	問16 男女一緒にしゃべりをしたり、遊んだりする	100	3.67(1.03)	3.87(1.98)	1.707
	問17 このクラスではお互いにも親切だ	100	4.23(1.85)	4.29(1.87)	.725
	問18 友達同士助け合う	100	4.58(1.69)	4.71(1.49)	2.004*
	問19 相手によって協力の仕方差はない	100	4.17(1.88)	4.15(1.95)	.161
	問20 誰の意見でも平等に扱われる	100	4.37(1.74)	4.19(1.95)	1.726
	学級への満足感	問30 このクラスは、心から楽しめる	100	4.24(1.02)	4.31(1.93)
問31 クラスで顔を合わせるのを楽しみにしている		100	4.11(1.02)	4.01(1.06)	.294
問32 このクラスになって良かったと思っている		100	4.37(1.88)	4.41(1.93)	.628
問33 この学級が気に入っている		100	4.20(1.02)	4.37(0.96)	1.943†
問34 このクラスは、笑いが多い		100	4.57(1.83)	4.58(1.78)	.754
問35 このクラスは、誉められることが多い	100	3.84(1.88)	3.93(1.90)	.272	
自己開示	問36 個人的な問題を安心して話せる	100	3.52(1.14)	3.38(1.25)	.985
	問37 自分達の気持ちを気軽に言い合える	100	4.01(1.09)	3.98(1.93)	.158
	問38 先生が側にも遠慮なく話せる	100	3.90(1.07)	3.89(1.07)	.891
	問39 自分たちの気持ちを素直に先生にみせる	100	3.89(1.05)	3.92(1.07)	.346

* $P < .05$ † $P = .052$

- ・生徒への多面的なアプローチができ、生徒の情報を得ることができた。
 - ・心の負担が少し軽減する。
- ウ 教員とＳＣと連携して取り組んだ結果、うまくいったこと
- ・生徒がため込んでいた苦しみをはき出せた。
 - ・その生徒へ多方面から関わることで、生徒にとってベストな解決ができた。
 - ・気付かなかった見方や言葉がけを知ることがある。また、自分の生徒への関わり方が間違っていないかどうか確認できる。
 - ・不登校傾向のある生徒へのアプローチの仕方や考え方を教えてもらえた。
- エ 今後のＳＣの活用方法
- ・Ｔ２としての授業参加。Ｔ２として生徒を見ることにより、生徒へのアドバイスや相談にきめ細かく対応できるので助かったから。
 - ・Ｔ２としての授業参加や生徒へのカウンセリング。生徒を色々な人の目で見守り、色々な対策を考えていけるから。
 - ・道徳などでも活用したい。ＳＣが授業を行うことで生徒の心情を深く引き出しているように感じた。
 - ・生徒や保護者への対応のアドバイスと生徒のカウンセリング
- オ ＳＣと連携するに当たっての課題
- ・頻繁に面談することが難しい。
 - ・連携を密にする。
 - ・時間がなかなかつかれない。
 - ・現状上手くいっているから課題はない。

6 考察

本研究では、二つの事を明らかにする目的で検証を行った。一つは、ＳＣと協働して実施するプログラムの有効性を明らかにすることである。もう一つは、連携体制の有効性を検証することである。まず、プログラムの有効性を明らかにするために、プログラムを実践し、アセスの結果をノンパラメトリック検定（ウィルコクソンの符号付順位検定）を用いて検証した。その結果、「向社会的スキル」の差が明らかになった。この要因として、「向社会的スキル」の質問項目である「相手の気持ちになって考えたり行動する」の平均値が上昇していることから、本プログラムの活動を通して、生徒が他者理解を深め、親和的な関係性が育ってきたことが挙げられる。「向社会的スキル」は、栗原（2013）が生活満足感への影響がどの因子よりも大きいと示していることから、学校環境適応感を高める有効性が示唆された。

さらに、「非侵害的關係」の下位群の生徒にも有意な傾向がみられた。これは、「非侵害的關係」の質問項目の「問 8 仲間に入れてもらえないことがある」「問 13 陰口を言われているような気がする」「問 23 友達から無視されるようなことがある」の平均値に差がみられたことから、本プログラムを通して他者理解が深まり、相手を思いやる気持ちが育ってきたことが要因として挙げられる。また、学級の様々な人と関わり、楽しく過ごすことができた経験から友人との関係性が向上したためと考えられる。このことから、本プログラム内容は、「非侵害的關係」が低い生徒にも有効であると推測された。

次に、ＣＣＩをノンパラメトリック検定（ウィルコクソンの符号付順位検定）を用いて検証した結果、「生徒間の親しさ」では、「問 15 男子と女子は仲が良い」「問 18 友達同士助け合う」の差が明らかになった。これは、男女関係なくグループを作り、グループアプローチや話し合い活動を実施したことが要因として挙げられる。これによって男女一緒に関わる楽しさを実感し、仲が深まったと考えられる。さらに、「学級への満足感」では、「問 33 この学級が気に入っている」の差に有意な傾向がみられた。他にも「問 30 このクラスは心から楽しめる」「問 32 このクラスになって良かったと思っている」「問 34 このクラスは笑いが多い」の平均値が上昇した。これは生徒の感想に「授業を重ねていくごとに考え方や友達関係などが深まったなと思いました。」「友達とのほどよい関わり方が分かったので前よりも友達という時間が楽しくなりました。」「あまり話したことがないような人とも明るく楽しく話せることができたので嬉しかったです。」とあることから、同級生と良好な関係を築けたことによって学級魅力が増したことが要因として考えられる。このことから、本プログラムは学級風土を高める要因になることが示唆された。

次に、連携体制の有効性について検証する。本プログラム実施期間において、ＳＣは学級担任を中心とする教員とコンサルテーションを行った。教員の感想に「学級担任が気にしていなかった生徒の様子に気づき教えてもらったことは、その後の対応の参考になった。」「生徒への多面的なアプローチができ、生徒の情報

を得ることができた。」「自分が気付けないことに気付いてくれて、生徒理解が深まった。」とあるように、教員はSCとのコンサルテーションの実施により生徒理解がより深まったと捉えている。さらに、「生徒へ多方面から関わることで、生徒にとってベストな解決ができた。」「自分の生徒への関わり方が間違っていないかどうか確認できる。」という感想から、教員はコンサルテーションが適切な支援に繋がったと評価している。実際、SCと教員のコンサルテーションの対象であった12名の生徒のうち7名は、学級満足感が上昇する結果となった。また、今後のSCの活用方法として、「T2としての授業参加や生徒へのカウンセリング。生徒を色々な人の目で見守り、色々な対策を考えていけるから。」「T2としての授業参加。T2として生徒を見ることにより生徒のアドバイスや相談にきめ細かく対応できる。」との感想から、教員は本研究の連携体制を肯定的に捉えていると考えられる。

加えて、本プログラム期間中に、教員からSCへの依頼で、教員と連携して個別対応を行った事例があった。面談内容について事前に確認し、今後の対応を相談するなど素早い連携につながった。これは、コンサルテーションを実施していたことで、教員もSCも相談しやすい関係性が築かれたことが要因の一つとして考えられる。特にSCにとっては、教員と話しやすい関係性を構築でき、日頃からの連携を密にしやすい利点があった。以上のことから、本研究の連携体制は、多角的な視点からの生徒理解につながり、生徒支援に効果があると考えられる。

IV 研究の成果と課題

本研究では、中学校において、不登校を予防するために、教員とSCが協働して、こころの健康促進のためのプログラムを作成及び実施し、連携を強化する体制を構築することの有効性を検証した。その結果、アセスの「向社会的スキル」得点が上がり有意差があった。これに加えて「非侵害的關係」因子で5.0未満の生徒の得点も上がり有意傾向であった。また、CCIの下位尺度「生徒間の親しさ」において、「男子と女子は仲が良い」「友達同士助け合う」の項目で平均値が上がり有意差があった。さらに、下位尺度「学級への満足感」において、「この学級が気に入っている」という項目で平均値が上がり有意な傾向がみられた。以上の結果から、本研究で作成したプログラムは学級風土を高める効果があり、学校環境適応感を高める効果が期待できる。

また、教員の感想から、SCとのコンサルテーションが教員の生徒理解を深め、適切な支援に繋がったと考えられる。さらに、今後のSCの活用方法として、SCの授業実施や、T2として授業に参加すること、そして、生徒や保護者へのカウンセリングを期待している。この結果から、教員は未然防止・初期対応の段階からSCと協働で取り組むことが生徒支援に効果的であり、多角的な視点から生徒を見立てることの効果を実感していると考えられる。

以上の結果から、教員とSCが協働してこころの健康促進のプログラムを作成及び実施し、連携を強化することは、不登校予防の取組の一つの手段として効果が期待できる。

一方で課題もある。本研究では、教員が多忙のため連携を密にできないという課題を考慮し、コンサルテーションを短い時間で定期的実施したが、課題は解消されなかった。これは、教員が必要としている時に連携を密にできないということが考えられる。SCが現状の勤務態勢のままであるならば、他の工夫点が必要である。

また、アセスでは「友人サポート」と「非侵害的關係」が有意差は認められないものの低下した。栗原(2013)は「非侵害的關係」と「向社会的スキル」には、負の相関があると示している。このことから本研究では「向社会的スキル」が上がったため、「非侵害的關係」が低下したと考えられる。しかしながら、「向社会的スキル」が伸びれば、「友人サポート」を改善することが可能であり、「非侵害的關係」を上昇に転換させることが可能でもある。したがって、SCと協働してプログラムを作成する際には、互いの良さや頑張りを認め合う活動内容を取り入れ、「友人サポート」を伸ばすことが不登校予防にはより効果的であると考えられる。

本研究をまとめるにあたり、御協力いただきました研究協力校の校長先生並びに関係いただきました先生方に厚く御礼申し上げます。

〈引用文献・URL〉

- 1 文部科学省 2020 「令和元年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」
https://www.mext.go.jp/content/20201015-mext_jidou02-100002753_01.pdf (2020.12.23)
- 2 文部科学省 国立教育政策研究所 2014 「生徒指導リーフ 『不登校の予防』」
<https://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf14.pdf> (2020.12.23)
- 3 本間友巳・竹内伸宜 1994 「中学生の登校を巡る諸問題(1)(2)」
- 4 小林正幸 2002 『先生のための不登校予防と再登校援助』, p.39, ほんの森出版株式会社
- 5 吉井健治 2016 「不登校の予防のための子ども理解と支援」
- 6 厚生労働省 2000 「21世紀における国民健康づくり運動《健康日本21》」
https://www.mhlw.go.jp/www1/topics/kenko21_11/b3.html (2020.12.23)
- 7 鈴木真之ら 2005 「学校現場における1次予防プログラム導入の可能性の検討ー従来の学校教育と新たなプログラムとの親和性の観点からー」
- 8 栗原慎二ら 2010 「アセスの使い方・活かし方」, pp.8-12, pp.73-78, ほんの森出版株式会社
- 9 伊藤亜矢子ら 2017 「新版中学生用学級風土尺度(Classroom Climate Inventory;CCI)の作成」
- 10 青森県総合学校教育センター 2019 「学級開きや普段のホームルーム活動で使えるグループアプローチ」
http://www.edu-c.pref.aomori.jp/?action=multidatabase_action_main_filedownload&download_flag=1&upload_id=15739&metadata_id=521 (2021.1.5)
- 11 ISTVAN BANYAI 1995 『ZOOM』, pp3-63, 復刊ドットコム
- 12 ISTVAN BANYAI 1995 『RE-ZOOM』, pp3-63, 復刊ドットコム
- 13 篠原信ら 1999 『実践 エジュケーションー心を育てる進路学習の実践サイコエジュケーション』, pp.112-119, 日本図書文化協会
- 14 田上不二夫ら 2015 『学級の仲間づくりに活かせるグループカウンセリング対人関係ゲーム集』, p.42, p.96, 金子書房
- 15 小泉令三ら 2011 『社会性と情動の学習(SEL-8S)の進め方 中学校偏』, pp.62-73, pp.114-117, ミネルヴァ書房
- 16 増田健太郎ら 2015 『心理教育素材集 生きる知恵を育むトレーニング』, pp.54-55, pp.104-108, 遠見書房
- 17 伊藤友美子ら 2018 「自己の多様性に気づかせる授業実践ー“自己との対話”をとおしてー」
- 18 竹田伸也ら 2018 『クラスで使える!アサーション授業プログラム 自分にも相手にもやさしくなるコミュニケーション力を高めよう』 付属CD-ROM, 遠見書房
- 19 恩田宗生ら 2015 「集散型学習の学習効果と個人の特性による差異について」
- 20 松本繁ら 2004 『教師とスクールカウンセラーでつくるストレスマネジメント教育』, p.40, pp.58-66, あいり出版
- 21 大阪府人権教育研究協議会 2020 「いま,どんな気持ち?2」
<http://daijinkyoin.coocan.jp/> (2020.11.20)
- 22 岩手県立総合教育センター 2007 「中学校1年生の早期適応のために」
http://www1.iwateed.jp/db/db1/ken_data/center/h19_tyou/h19_17c2_01.pdf (2020.11.20)
- 23 栗原慎二 2013 『いじめ防止6時間プログラム』, pp.91-92, ほんの森出版株式会社